

自己理解とアイデンティティ

小 沢 一 仁

はじめに

心理学を学ぶ動機のひとつに、自分が自分自身のことを知りたいという自己理解への思いがある。これまで、自己理解の重要性が指摘されており、西平(1964,1970)、落合(1993)は、研究対象である青年に対して、彼らの自己理解を深めることについて言及している。この点から、筆者はアイデンティティ概念を居場所を物語として捉え直し、自己理解を目指した研究の可能性を探ってきた(小沢、1996)。そこでは、研究の目標である自己理解に対して、そのために用いる概念としてのアイデンティティ概念という位置づけに留まっていた。これでは、目標として設定した自己理解が、アイデンティティ概念にどのような反映されるのか、言い換えると、捉え直したアイデンティティ概念が自己理解にどう生かされていくのかが明確ではなかった。そこで、アイデンティティ概念の中に、自己理解を取り込んでいく必要があり、このことによって、アイデンティティ概念を自己理解に寄与するものとして捉え直すことができると考えられる。

以下に本論では、第1章において、自己理解を、自分への問いおよびその答えとして提示する。次の第2章では、アイデンティティ概念におけるアイデンティティの感覚を説明し、自分への問いの発生について述べる。さらに、第3章および第4章では、この自分への問いに対して、居場所を探しと物語をつくることによって答えていくという見方を再度提示し、エリクソン(E.H.Erikson)の記述した事例を示しながら検討していく。

1. 自己理解とは

(1) 心理学の中での位置づけ

心のあり様を明らかにするものが心理学という学問であるとすれば、自己理解とは心理学の中でどのように位置づけられるだろうか。

人間の心は、心それ自体を抽出して純粹に取り出して扱うことはできない。心は、その心が現れる現象、状態においてはじめて捉えることができる。そのため、心理学には様々の分野、領域があり、その領域ごとに心とは何かというアプローチを行っている。それでは、自己理解とは、どのような領域において捉えられるものであろうか。

心とはひとりひとりの人間がそれぞれもつものであり、ひとりひとりの人間が自分自身について知ろうとするとき、自己理解は問題になる。つまり、個人が個人に対して問いかけ、生きている個人が自分自身を明らかにしようとする思いを持つとき、その問題を扱う領域が、自己理解の領域であるといえる。

(2) 精神分析における自己理解

フロイトの提唱した精神分析においては、意識・前意識・無意識の局所論と自我・超自我・エスの構造論の二つの見方で心を捉えている。エリクソン(1970)は、「精神分析は最初の体系的な、そして活発に意識を拡大する方法」であると述べ、精神分析が意識のもとに、無意識に潜むものを明らかにする方向性をもつことを指摘している。さらに、エリクソンら(1986)は、私Iおよび気づいていること awareness という概念を提示している。そこでは、「フロイトのIchが英訳された自我 ego」ではなく、「日常生活の意味での私I」の重要性を指摘している。私Iとは、「自己を示す代名

詞」であり、「他者と区別するもの」であり、「精神的な人格 the spiritual personality」とし、「私達それぞれは、・・・宇宙の中心で気づいていること awareness の中心である」と述べている。先に示した局所論と構造論における記述からすると、私 I とは、意識された自我であると言うことができる。さらに、この私 I は、より意識を「拡大」するという方向性を持ち、「私 I について話すとき」、「気づいていること awareness または気づくことへの欲求 need for an awareness」を示すとしている。このことから、自己理解とは、私 I が私自身に対して、気づき awareness をもつことであるといえる。

(3) 青年心理学における自分への問い

青年心理学の古典であるシュプリンガー(Spranger, E, 1927)は、発達の中の青年期において、「自我の発見」という現象を、次のように示している。

「(自我の発見とは)・・・眼を内界に向け・・・主観をそれ自身一個の世界として発見することである。・・・主観はいまやそれ自身ひとつの世界となる。『内界にもひとつの宇宙がある』この体験が始まるのである。・・・(この体験においては)『自分はなにゆえ生きているのであるか、なにゆえむしろ一切が無ではないのか』・・・『なにゆえ自分は存在するのか、自分の価値はどこにあるのか』という疑問(が生じるのである)。」(かつこ内は筆者)このように、自我の発見という、自分が自分自身に対して問いを発することが、青年期に特徴的な心的現象であることが指摘されている。

このことに関して、西平(1970)は「青年への問い」を、落合(1993)は「青年へのメッセージとしての研究」を提唱し、青年自身の自分への問いを促進させる働きかけの重要性を指摘していると言える。また、返田(1988)は、青年における生き甲斐について考察し、青年が「自己への問い、自己の生き方を問い、真剣に生きることの意味を問う姿勢」について言及している。

さらに、実証的研究においては、渡辺の自我の芽生えについての研究(1995)、大谷の自我体験の

研究(1996)などにおいて、実際の調査が試みられている。

特に、天谷(1996, 1997)は、W, James の主我 I と客我 Me の見方を用いて、自らが主我 I と客我 Me が分化し、自分に対して問いかける体験を「自我体験」と述べている。そして、青年を対象にした自由記述及び面接調査により、自我体験のプロセスを、「自分というものの問いかけ」から、「自分というものへの意識・自分なりの確立」へと示している。この天谷の見方においては、自分が自分自身とは何かという問いと、それに続く、この世の中で独自の存在としての自分の自覚が自我体験とされている。

(4) 自分への問いと答えとしての自己理解

青年心理学の流れの中で指摘されてきた青年における自分への問いの指摘とともに考えると、先に示した天谷の指摘する、自分自身に問いかけ、独自の存在としての自分自身に気づくことである自我体験は、自己理解に至る前段階を示しているものと考えることができる。自分が自分のこと知ろうとするには、自分への問いが不可欠である。自分が自分に問いかけることは、自分のことを知ろうとする思いに関連している。自我の発見、言い換えると、自分への問いかけは、自己理解の前提として考えられる。自分のことを理解しようとする思いが、自分への問いかけとして表されているといえる。

このことから、自己理解とは、問いと答えのプロセスとして捉えられる。まず、自分への問いがあり、その問いへの答えを求めて様々な試みとしての活動が行われる。このように、自らを問い、そして答えを出そうとする活動を自己理解ということができる。

2. アイデンティティ概念をアイデンティティの感覚として捉える

ここでは、先に示した自分自身を問いそして答えを模索するという自己理解について、まず、自分自身を問うことを、アイデンティティ概念においてその概念の発祥から見ていく。

(1) アイデンティティ概念の発祥

エリクソンは、アイデンティティ概念の発見にいたるきっかけに相当するものを次のように記述している。「戦争終結以前に神経症で除隊になった退役軍人を扱った研究で・・・身体的緊張、社会的パニック、自我不安が常にあらわれていた。なかでも、彼らは自分がだれかもはやわからなくなっている they "did not know any more who they were"と感じていた。これは、自我アイデンティティの明かな喪失であった(Erikson,1959)。」危機的状況にさらされた彼らは、自分が誰であるかわからなくなってしまうていた。彼らは、「何」を失ってしまったのだろうか。エリクソンはその欠けている「何」かをアイデンティティと名づけたのである。欠けているのは何かというアイデンティティ概念の発祥の経緯は、この概念がもつ宿命としての不明確さと関連していると考えられる。

(2) アイデンティティの感覚としての sameness and continuity の感覚

先の引用に続いてエリクソンは、アイデンティティを、アイデンティティの感覚という側面から次のように示している。「(彼らにおいては) sameness and continuity の感覚と、社会的役割への確信はなくなっていた。このような臨床的観察において、私は・・・はじめてアイデンティティの感覚の基本的な喪失という仮説を発見したのである(Erikson,1967)。」彼らが失っているアイデンティティとは、sameness and continuity (以下適訳がないので原語のまま用いる：筆者注)の感覚であり、その sameness and continuity の感覚を、エリクソンはアイデンティティの感覚としている。

さらに、このアイデンティティの感覚においては、自分だけの問題だけではなく、他者からの承認も必要であることを次のように示している。「・・・そもそもひとつの人格的なアイデンティティをもっているという意識的な感情は、同時に行われる二つの観察に基づいている。それは、時間的な自らの sameness and continuity の直接的な知覚と、他者が自らの sameness and continuity を

認知していると言う事実の同時的な知覚である(Erikson,1950)。「自我アイデンティティの感覚とは、内的な sameness and continuity を維持する能力—精神分析の意味では自我—が、他者におけるその個人の意味する sameness and continuity に一致するという自信のことである(Erikson, 1950)。」つまり、アイデンティティの感覚とは、自分の sameness and continuity の感覚をもって、さらに、他者からもそういう自分のことを承認されているということを示している。

sameness and continuity を、山中恒の児童小説のタイトルの「ぼくがぼくであること(山中,1975)」からとり、私が私であることと捉えるならば、sameness and continuity の感覚とは、自分が自分であることをしっかりとつかんでいると言う感覚であり、sameness and continuity の感覚の欠如とは、自分が自分でないように感じることを示すと言える。そして、アイデンティティの感覚とは、自分が自分であることを自分でもしっかりとつかんでいるし、他者からも自分が自分であることを認められていると感じていることを示すと言える(鏡, 1995)。

(3) 青年期における諸変化

エリクソンは先に示したアイデンティティ概念を臨床で用いる概念から、生涯に渡る発達過程の中における青年期において顕著な概念へと転用した。彼は、生涯発達過程を心理社会的発達段階として提示し、青年期においては、アイデンティティ達成対アイデンティティ拡散の葛藤というアイデンティティ危機が生じるとした。そこでは、「・・・それ以前に頼っていた sameness and continuity のすべてが思春期や青年期に問題になる。なぜならば、・・・急激な身体的成長と・・・身体的な性器的成熟が起こるからである(Erikson,1950)。」とし、青年期には、身体的な変化が起こる。この時期には、身体的変化以外にも、心理的变化、対人関係の変化及び置かれた状況の変化という社会的変化が生じ、発達における危機の時期として捉えられている。

このような諸変化は、アイデンティティの感覚、

つまり、sameness and continuity の自他承認の感覚をゆさぶり、ときに、自分への問いを生じさせる。また、青年期以外でも、生涯に渡るあらゆる時期において、諸変化によって自分への問いが生まれる可能性があるといえる。

(4) 主観の持つ違和感としてのズレ

アイデンティティ概念の中で、アイデンティティの感覚を sameness and continuity の自他の承認の感覚として捉えたが、筆者は先に、アイデンティティ概念を生涯発達の鳥瞰図からの着地し主観の視点をとって捉えることを提言した(小沢,1996)。この視点においてアイデンティティの感覚がどのように、主観において捉えられるかを考える。西平直(1997)は、「ズレ」という表現を用いて、アイデンティティの感覚、つまり、sameness and continuity の感覚をもち得ない状態を示している。このズレとは、身体・心理・対人関係・社会的状況という諸変化を受けて、個人の主観が感じる違和感であると言うことができる。このズレという表現は、sameness and continuity に対する自他承認の感覚をより、主観の立場に即して表現したものといえる。このズレという表現をすることによって、個人が持つアイデンティティの感覚をもち得ず、自分自身の生活や人生に対してしっくりこない思いを的確に表すことができる。

(5) ズレの基準とは一生き生きとしたかかわりあい vital involvement

あるときに、我々は自分自身がしっくりきているという感じを持ち、あるときには、ズレという違和感を感じる。このようなズレをもつ基準には何があるのだろうか。

エリクソンら(1986)は、生き生きとしたかかわりあい vital involvement という概念を提出し、「・・・人生の最初の段階から最後の段階まで、各段階に必要な生き生きとしたかかわりあい the vital involvement necessary at each stage, from the first to the last」が重要であることを示している。そして、この生き生きとしたかかわりあい vital involvement について、第一にまず、involve-

ment には、「逃げることのできない複雑で受動的なかかわり過ぎ」、時に、「helpless で hopeless なかかわりあい」という意味もあるとして、「vital」をつけ積極的な意味を「強調」したと述べている。第二に、involvement は、「人が出生前に母親の vulva (陰門) に含まれるという意味に結びつく」と、その原意をフロイト的にさかのぼって示し、現代の胎児及び乳児研究の成果から、「そのかかわりあいとは、環境 environment がわれわれに刺激を与えるのと同じように、われわれも環境に刺激を与えることによって生きているということの意味する。」と述べ、世界との相互作用の重要性を示唆している。ここには、フロイト流解釈に、相互作用 mutuality を付与し、自らの概念として用いるというエリクソン特有の姿勢が見られる。第三に、生き生きとしたかかわりあい vital involvement と、心理社会的発達段階を「関係づけたい。」とし、「心理社会的発達の8つの段階は、相互的なかかわりあい a mutual involvement のために必要な力 strengths をつくり出す。」としている。

このように、エリクソンは、生涯に渡って、他者そして社会、言い換えれば、ひとりの個人が生きている世界との相互関係の中で生き生きとしたかかわりあいを持って生きることの重要性を示唆している。先に示した自分自身に対してズレを持つということには、様々な状況において生き生きとしたかかわりあいを持ってなくなったことを示していると考えられる。つまり、この世界に対して、生き生きとしたかかわりあいを持ってなくなった際に、ズレという主観的な違和感をもつのではないか。つまり、このズレの基準として、この世界の中で自らが、生き生きとしたかかわりあいを持ちたいという思いがあると考えられる。

前章で示した自己理解を自分への問いと答えとして捉えたことに引き続いて、本章では自分への問いが生まれることを、アイデンティティ概念におけるアイデンティティの感覚によって考察してきた。アイデンティティの感覚である、sameness and continuity の自他承認の感覚がもてないことを、個人における主観的な違和感であるズレとし、このズレが自分への問いを生みだし、さらにズレ

が大きくなった際に、アイデンティティ拡散という状態に陥るといえる。そして、このズレを持つ基準として、世界に対して生き生きとしたかわりあいをもちたいという思いがあった。つまり、自分への問いとは、生き生きとして生きたいという思いをかなえるため発せられるものであるということができる。

3. 自分への問いへの答えーその1・ 居場所としてのアイデンティティ

本章では、前章で考察した自分への問いに対する答えとして、エリクソンのアイデンティティについての記述の中から、居場所という捉え方を提示する。

(1) 居場所ー社会の中の適所

エリクソンは、小説家の G.B.ショーの言葉から次の引用している。「たしかなのはすべての人間は、自分の可能性を実現し、その影響を隣人に及ぼすまでは社会の中でかりそめの位置しかしめられない。彼らは自分自身の・・・欠点に悩まされるが、しかし、・・・思い上がりで他人をいらいらさせる。・・・すべての人は、自分の生まれより上であろうと下であろうと自分の自然な場所を見つける has found his natural place までは、心穏やかではいられない(Erikson,1950)。」とし、自分にとっての社会の中での居場所を見つけることの重要性を指摘している。さらに、「この時期(青年期)は心理社会的猶予期間として見ることができ、この間に青年は自由な役割実験を通して社会のある部分に適所 niche を発見する。この適所は、はっきりと規定されているにも関わらず青年にとっては自分にとってユニークなものであるように思えるものである。この適所を発見する中で、青年は内的な continuity と社会的な sameness の確かな感覚を得る。この感覚は、彼が子どもとしてあったものと、これからなろうとしているものの間に橋渡しをし、彼の自分自身についての概念と彼の住む共同体の彼に対する承認を一致させるだろう(Erikson,1950)。」と述べている。

上記の引用から指摘できるのは、第一に、same-

ness and continuity の自他承認の感覚としてのアイデンティティの感覚は、社会の中の自分の居場所ーしかもそれが適所と言えるものであるものーが得られて持つことができるといえる。ズレを感じるのも、反対にアイデンティティの感覚を持つのも、個人における感覚の問題であるが、居場所については、個人の社会の中での活動が問題になる。自分への問いを発してもそのままでは何も変わらず、社会の中で適所を得てはじめて、ズレを修復し、アイデンティティの感覚を持つことができるといえる。第二に、適所をつかむまでの期間を心理社会的猶予期間とし、その猶予期間の中で、適所を得ようとする試みである活動を役割実験としている。この自分にふさわしくしかも他者からも承認される適所を求める試みを、「実験」とエリクソンが名付けたのは、当然失敗もありうる試行錯誤であるからと言える。

(2) 役割実験についての事例

次に、エリクソンのあげる役割実験の事例を見ながら、役割実験を通して、居場所を考えていきたい。エリクソンは、ジルという名前の女子学生の事例を次のように示している(Erikson,1967)。

まず、このジルの青年期以前の様子について「思春期以前はかなり太っていて過食と依存性という多くの口唇期的特徴をもっていた。その一方で、おてんばで、兄弟たちにとっても嫉妬深く、彼らをライバルとしていた。」と述べている。その反面、「しかし、彼女は知性的であり、すべてはいつかうまくいくことを約束するように思える感じが感じられた。事実、彼女はまっすぐに成長し、とても魅力的になり、どんなグループでも寛大なリーダーとなり、多くの人にとって少女時代のひとつのモデルとなった。」としている。そのため、「臨床家として、彼女が大食癖と以前に示していた競争にどう対処するかについて・・・不思議に思っていた。そのようなことが偶然の成長の中に簡単に吸収されることがありえるだろうか？」とエリクソンは述べている。ジルはその後、「十代終わりの秋に、夏に過ごした牧場から大学に帰ってこなかった。彼女は、両親に牧場に留まっていいかと

頼んだのだった。寛大さと信頼によって、両親は彼女の猶予期間を認めた。その冬、ジルは生まれただけの子馬の世話を専念し、冬の夜いつでも起きて腹を空かした子馬にミルクを与えたのだった。彼女自身の中で確実な満足を得て、カウボーイ達からは驚きを持って認められ(た。そして)、彼女は家に帰って行き、もとの場所を再び受け入れていった。」

ここに示された役割実験は彼女にとって、「活動的に、しかも、他者のために、かつては過食によって表現していたように、自分の世話をするためにつねに熱中していたことを行う機会を見つけた」対象であったと言える。この牧場での体験において、「彼女は受け身的なものを活動的に転換し、先に述べた症状を社会的な活動に転換する」ことができた。エリクソンは、このジルの体験を「ある種の余裕が与えられた青年が、否定的アイデンティティの残余に対処するために伝統的な生活様式を利用した」ものとして、これを「自らによって選択された治療 self-chosen therapies」と呼んでいる。

(3) 居場所を見る視点・構成と状態

先に筆者は、居場所を構成と状態の二つの見方で見ていくことを提示した(小沢,1996)。まず、居場所の構成についてみていくと、ひとつの居場所は、本人と他者と対象の三角形によって構成される。このジルの牧場での役割実験の事例では、対象とは子馬の世話であり、他者とは牧場で働くカウボーイたちであるといえる。それ以前においては、対象とは過食および兄弟との競争と言え、他者とはライバルである兄弟たちであると想定することができる。

次に、居場所の状態をみていくと、本人と他者との関係はどうか、そして、本人がいかに対象に関わっているか、この二つのことから見るができる。

まず、他者との関係については、牧場以前では、兄弟たちに対しては、嫉妬深くライバルということから、互いが認め合う、承認し合う関係とは言いがたい。それに対して、牧場では「カウボーイを

達から驚きを持って認められることを明らかに得(た)」「男から女として認められことと同様に、男から男として認められることをもたらした。」とあることから、ジルが、カウボーイという他者から自分が認められることを得たことを示している。

さらに、対象に対してどのように関わっているかと言う点では、マーシャ(Marcia,1966)によるコミットメント、および、エリクソン(Erikson, 1950)がいうところの「葛藤なしに conflict-free」にその対象に打ち込んでいるかと言う指摘を受けて考えると、本人がその対象に対して生き生きとして打ち込んでいることが重要である。ジルの例では、牧場以前の過食という対象に対しては、葛藤なしということはいえないだろうし、過食に生き生きとして打ち込んでいることはいえない。また、牧場では、子馬の世話という対象に対しては、「冬の夜いつでも起きて腹を透かした子馬にミルクを与えた」「彼女自身の中で確かな満足」を得たとあることから、生き生きとして打ち込んでいたと言える。以上のことから、過食と兄弟との対立というジルの牧場以前の居場所に関しては、適所であると言えることはできない。それに対して、牧場での居場所は適所であるといえる。

(4) ひとりひとりに異なる居場所に込める意味と切実さ

エリクソンらは、生き生きとしたかかわりあいという概念を、他者との関係においても、また、趣味や仕事など様々な対象に対しても用いている。つまり、生き生きとしたかかわりあいの向う先とは、個人が生きている世界全体に関して用いている。居場所の中でも、適所であるかどうかという居場所の状態を見る上においては、上記のように、対象と他者に分けてそれぞれのあり方を見ていることが必要であると考えられる。

そして、居場所という表現は、様々な意味が込められ得るものである。ある人は、積極的に打ち込んでいられるものを居場所と言うし、ある人は安らいでるものを居場所と言う。「あなたにとって、居場所とは？」という聞き方をすると、人そ

れぞれ様々な居場所があるだろうし、ひとりの個人においてもいろいろな居場所があると考えられる。この点で、そのようなひとりひとりの込める意味を許容する概念として、居場所を捉えていきたい。つまり、居場所を個人の持つ多様性のある、主観の意味構成を許容する概念として捉えることによって、居場所という概念は、より人間の心に迫れるものになりうるといえる。

さらに、居場所において指摘しなければならないことは、「切実さ」である。個人が持つ居場所における意味は様々ではあるが、それぞれの個人の持つ様々な居場所において、本人がその居場所がなければ自分は困るといふくらいの切実さが、居場所が居場所といえるものであるために必要である。本人にとって、切実なものとして捉えられる居場所こそ、その個人が生き生きとした世界とのかかわりあいをする上で、重要なものであるし、人によっていかに多様性を示そうともその意味をくみとっていくことが必要であると考えられる。

4. 自分への問の答えーその2・

物語としてのアイデンティティ

前章では、自分への問いかけに対する答えとして居場所というアイデンティティのひとつの捉え方をしてきたが、本章では物語としてアイデンティティを捉える見方について考察する。

(1) 意識化された同一化群の統合を物語と捉える

現在において過去を捉え直すアイデンティティの側面について、エリクソンは次のように述べている。まず、自我の防衛機制を発達的に捉えその中にアイデンティティを位置づけ、「取り入れー投影、同一化、アイデンティティ形成を子どもたちの（他者との）相互作用の中で自我が成長していく段階的な発達過程とみなす」と述べている。ここで、アイデンティティとは同一化の次の防衛機制と捉えられている。ついで、アイデンティティと同一化との関係について、「アイデンティティ形成は（子ども時代の）同一化の有効性が終わるところからはじまる。」として、児童期以前の同一化

と青年期に入ってからアイデンティティを区別している。そして、「子ども時代のすべての同一化群を、社会におけるより広い部分によって与えられる役割と一致させながら、ある独特な方法で、再統合すること・・・」また、「アイデンティティとは、子どもが依存する大人のように、なりたいたいと思ひ、そして、なるようにしむけられた青年期以前から引き続く同一化のすべての総和以上のものを含む。」とし、「ひとつのユニークな産物」である(Erikson,1950)と述べ、青年期以前の同一化群を新たに再構成し直したものがアイデンティティであることを示している。

このような指摘から考えると、まず、同一化とは、フロイトの説明によれば、エディプス・コンプレックスにおける、同性の親への嫉妬と異性の親への愛情のアンビバレントな対立を、同性の親になろうとすることによって解決するひとつの発達上で生じる防衛機制である。このことを考えると、同一化とは父と母と私の三者関係の中での居場所を得るひとつのあり方と言うことができる。また、親以外にも様々な対象に子どもは同一化を向ける。青年期になり、これらの過去の同一化、言ってみれば過去の子どもの居場所から、大人としての居場所を模索し、適所をめざしていく。この際の同一化群の統合とは、過去の居場所から現在の居場所への転換を、個人が成し遂げることであるといえる。そして、この同一化群の統合とは他の防衛機制のように無意識のうちになされることであろうが、これを意識において捉えようとしたものが、過去から現在における自分の物語であるということができる。

(2) エリクソンによる心理社会的アイデンティティと実存的アイデンティティ

アイデンティティの前に様々な用語をつけ、アイデンティティの様々な種類が示されているが、エリクソンら(1986)は、心理社会的アイデンティティpsycho-social identityと、実存的アイデンティティexistential identityについて言及している。心理社会的アイデンティティとは、生涯に渡る発達段階において、それぞれの時期におけるア

アイデンティティといえる。これは、先に示した居場所に対応していると考えられる。発達段階の変化に従って、心理社会的アイデンティティが発達していくことは、居場所の変遷として捉えることができる。

次に、実存的アイデンティティとは「人生全体としての私”I” in the totally life」、「その人固有の存在が意味するようになってきているもの what his or her unique existence is coming to mean」と述べられている。心理社会的アイデンティティが人生のそれぞれの時期におけるアイデンティティについて言及しているものであるとすると、実存的アイデンティティは、始まりと終わりのある自らの人生を捉えることを指すと考えられる。ここでは、時間的流れである過去から未来を、本人がどう捉えるかということが重要となってくるといえる。そして、この実存的アイデンティティとは、自らの人生全体を今の地点で捉えたものであり、これを個人の意識の上で意味構成された物語として考えることができる。

西平による生育史心理学および橋本によるアイデンティティを物語として捉える指摘は、この個人の物語を読み解く試みであると言える(西平, 1996、橋本, 1996)。この点に関して、五味(1988)は、「シュブランガーの了解を納得—説得—会得の了解過程として発展させた西平の生育史心理学にもとづく『物語』は、いわば説明と了解という2つの斜面のもつ稜線であった」と述べている。筆者は、現象学的視点により物語を、先に示したように鳥瞰図から降りた個人の主観が意味構成しているものとして(小沢, 1996)捉えたいと考えている。

我々は、先の章で示した自分への問いが発生したとき、過去の居場所から現在の居場所の変遷、さらに、未来の居場所へ思いをはせることがある。その問いに答えようとして、これまでの子どもの頃の自分がどうであって、今の自分はどうかであり、そしてこれからの自分はようになっていくのかという、自らについての過去の回想および現在の自分そして未来の見通しである自分の物語を構成すると考えることができる。

(3) 物語についての事例

筆者は、これまでアイデンティティを物語として捉える試みの中で、これからあげるエリクソンの事例について考察した(小沢, 1992)。ここでは、再度エリクソンの記述(Erikson, 1967)を考えていきたい。

エリクソンは、「自らの生まれを虚言によって再構成することは起こり得る。」とし、「中部ヨーロッパ出身の先祖をもつ、ひとりの特別な創作力のある高校生は、秘かにスコットランド移民の仲間を求め、彼らのなまりと社会的習慣を注意深く学び、そして簡単に身につけたのであった。歴史書と旅行ガイドの助けをかりて、彼女は、独力で、スコットランドの実際の町を生育環境とした子ども時代を再構成した。それは、・・・その国の子孫たちをまったく信じ込ませるかのようなものであった。彼女はアメリカ生まれの両親のことを『こちらに私をつれてきた人たち』と話していた。」そして、エリクソンに彼女が紹介されたとき、「ローナ」と自己紹介をし、「・・・詳細に向こうでの子ども時代を語った。」という。彼女がこのような創作した自らの物語を形成した理由について、エリクソンは次のように述べている。「私はその物語に耳を傾けた。その物語は、それが事実である以上の内的な真実をもっていることを言い表していた。そして、実際に、その内的な真実は、ひとつの思い出であることがわかった。すなわち、彼女のかつての隣人の女性に対しての愛着であり、その女性はイギリス諸島出身で、彼女の両親が行ってきた以上の、彼女が望んでいたある種の愛情を彼女に与えていたのであった。つくられた真実の妄想に近い力 power の背後にある力 force は、両親に対する死の願望であった。これは、すべての重いアイデンティティ危機に潜在するものである。」、両親に対する葛藤から、隣人の女性を親代わりとした物語を形成したことを理由をこう述べている。「・・・最後に私が彼女に、どのようにしてスコットランドの生活の詳細に渡るすべてを整理することをなしとげたのかを尋ねたときに、表に現れてきた。『おやまあ、先生』と彼女はスコットランドなまりで言い訳しながら言った、『私には過去が必要だった

んですもの。』」このコメントは、彼女にとって、創作した物語が必要であることを示している。ここで、考えるべきことは「どうして必要であったのか。」ということである。

過去を創作したローナの「私には過去が必要だったので。」という言葉に見られる、自分自身の過去の体験の必要性とは、自分への問いに対しての答えを得ようとすることに関連していると考えられる。アイデンティティの感覚がもてなくなり、自分への問いが生まれたときに、どのようにこの問いに答えるか。前章では居場所、さらには適所を求めることによって答える試みを示した。それとは別に、自分の物語をもつことによって答える試みもあると考えられる。自分にとって生き生きとした世界とのかかわりあいを持ちたいと思う時に、たとえ虚構であることも、自らが納得する物語を構成してしまうこともあるといえる。

(4) 過去の物語は現在の居場所に影響を与える

エリクソンら(1986)は、老年期において、老人が次の世代に対して、自分の物語を語ることの重要性を述べている。そこでは、「彼らにはもうほとんど姿を消しつつある世界と人生についての物語がある。・・・これらの話をする機会が与えられるべきである。なぜなら、彼らの話はわれわれすべてを豊かに」するとし、「物語を上手に話す・・・これは・・・分担されたアイデンティティという橋を伝わって次の世代の生存者へ、すなわち未来へと受け渡すことで、ひとつの世代が自らを次の世代へと託す・・・」と述べている。また、「老年者たちの心を開放させて、過去の回想を散文あるいは韻文で書いて貰う仕事をしてきた人たちは老年者たちの自己表現能力に驚いている。その結果、これら老年者の活気と生命力の感覚が高められる・・・」とも述べている。これらの指摘は、物語を語る側にとっても、聞く側にとっても、物語は生き生きとした活力を発揮する可能性があることを示している。

物語とは、自分への問いが生じ、その答えを模索する中で構成されるものであると言えるが、そ

れは、自分自身の心の中でのことである。しかし、自分の物語とは自分自身の心の内に秘められているものではなく、いつかは他者との関係の中で語られる可能性を持つものである。他者との関係の中で語られる際には、居場所の指摘の中で切実さが重要であると示したように、物語においても、このことを語らないと自分のことはわかってもらえないという切実さが重要である。このような切実さを持たない過去の出来事は、物語とは言えないのではないか。そして、他者に切実さのある物語が語られた場合、その物語が他者に理解されるならば、その他者との関係は、現在の語った本人にとっての居場所となり、現在の居場所を適所にし、現在の居場所を生き生きとしたものにする影響を、物語は持つと言える。

(5) 物語の危険性と他者からの承認

物語に付随する問題として、肥大した自己愛に陥る危険性をこれまで筆者は繰り返し述べてきている(小沢,1992,1996)。さらには、ローナのように、実際の過去を否定し、自らの思いを重視するあまりに、虚構の物語を創作してしまう危険性もある。

自己愛に満ちたもの、または虚構の物語では、当然他者からの承認は得られない。この点で、自他の承認は、アイデンティティの感覚において、さらには居場所において指摘されたように、この物語においても必要とされることである。また、自己理解ということも、自分を理解する基準については、当然、他者からの承認を我々は無視することはできない。人間が社会の中で生きている限り、居場所においても、他者なしにありえないし、物語においても、語るべき他者、承認されるべき他者なしにあり得ないと言うことができる。

5. ま と め—アイデンティティの起点

本論ではまず、自己理解を自分への問いと答えとして提示した。そして、自分への問いは、生き生きとして生きたいという思いがかなえられないときに、アイデンティティの感覚が失われたときに、生まれるとした。さらに、その自分への問い

に答えようとする試みとして、アイデンティティのひとつの側面として、社会の中で自分の居場所を見つけようとするところがあり、さらには、アイデンティティのもうひとつの側面として、自分の物語をもととすることがあると示した。

この中で、アイデンティティの感覚、つまり、sameness and continuityの自他承認の感覚の指摘は、主観的な違和感であるズレが修復されるものであるという前提にたっている。しかし、ある場面の自分と他の場面の自分との間のズレ、過去の自分と現在の自分の間のズレ、および自分と他者との間のズレは、実際に解決されるものであろうか。エリクソンはアイデンティティの発達は生涯続くものであり、心理社会的発達段階において危機と解決は誕生から死まで続くとして指摘しているように、ズレは生涯に渡って危機として生じ修復を目指されるものである。

先に示したように、ズレは、自分と他者の間にもあり、過去の自分と現在の自分、そして、現在の自分と未来の自分との間にもある。さらには、より、根本的なズレは、こうして生きている自分と、このように生きている自分を見つめている自分との間にあると考えられる。この自分が自分であることの謎について、先に示した「ぼくがぼくであること」(山中,1970)という表現を用いれば、前者の「ぼく」とは、意識された自我であり、Jamesの主我I及びE.H.エリクソンの私Iに相当し、後者の「ぼく」とは、Jamesの客我Meに相当し、時代、社会、地域、民族、親、容姿、能力、という様々な宿命をもって生きている自分を指すものであると考えられる。そして、この意識を持った自分が、なぜこの宿命のもとに生まれてきたか、という自分が自分であること疑問は、アイデンティティの出発点、起点として、位置づけることができる。

この起点から生じるズレは、安直に解決されるものとして捉えることはあまりにも、安易な見方のもとに人間を見ようとする見方である。しかし、かといって、ズレを放置しそのままよしとする見方も、人間の生き生きとしていきたいという思いを無視したものである。このズレを何とか修復

しようとし解決しようとする試み、その姿勢こそを重要視したい。特に、宮下(1997)はアイデンティティにおける、他者と共に生き希望をもって歩むという点を強調している。以上、自分への問いの答えへの試みとして、アイデンティティ概念を居場所及び物語として捉えてみた。上記のアイデンティティ概念を巡る、起点と方向性を、今後とも理論的に整地化して提示していきたい。

引用文献

- 天谷 裕子 1996 自我体験の研究 名古屋大学研究紀要
 天谷 裕子 1997 自我体験の実証的研究 第38回日本教育心理学会発表論文集
 Erikson,E.H. 1950 Childhood and Society. W.W Norton (仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 みすず書房)
 Erikson,E H 1959 Psychological Issues: Identity and the Life Cycle. International Universities Press (小此 木啓吾訳編 1973 自我同一性 —アイデンティティとライフサイクル—誠信書房)
 Erikson,E H. 1967 Identity Youth and Crisis. W W Norton. (岩瀬庸理 訳 金沢文庫)
 Evans,R.I. 1967 Dialogue with Erik Erikson Haper & Row (岡堂哲雄訳 エリクソンは語たる 新曜社 1981)
 Erikson,E.H., Erikson,J.M & Kivnick,H.Q 1986 Vital Involvement in Old Age (朝長正徳・朝長梨枝子訳 老年期 みすず書房)
 五味 義夫 1988 青年の生活感情と感動 青年心理学ハンドブック 福村出版
 橋本 広信 1996 ライフストーリーメタファーによるアイデンティティへの概念 日本青年心理学会第4回大会論文集
 橋本 広信 1997 エリクソンの方法論 アイデンティティの本質を探る 第38回日本教育心理学会シンポジウム話題提供
 Marcia,J.E 1966 Development and validation of ego-identity status Journal of Personality and social Psychology,3,551-558.
 宮下 一博 1997 アイデンティティの本質を探る 第38回日本教育心理学会シンポジウム企画説明
 西平 直喜 1970 青年心理学方法論序説 平安書院
 西平 直喜 1996 生育史心理学序説 金子書房
 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版
 西平 直 1997 アイデンティティの出自 アイデンティティの本質を探る 第38回日本教育心理学会シンポジウム話題提供

- 小沢 一仁 1992 人それぞれが創る物語 山添正編著
現代日本の子どものエコロジー プレーン出版
- 小沢 一仁 1994 a 心理学のパラダイムからみたアイデンティティ・モデルの模索 帝京学園短期大学研究紀要第6号
- 小沢 一仁 1996 a アイデンティティを居場所と物語として捉え直す概念的試み 日本発達心理学会第7回大会学会発表 論文集
- 小沢 一仁 1996 b 現象学的アプローチを用いた青年の自己理解のための対話的研究の模索 帝京学園短期大学研究紀要 第8号
- 小沢 一仁 1996 c 自己理解のためのアイデンティティ概念の捉え直しの試み 東京工芸大学工学部研究紀要第10号
- 落合 良行 1993 青年の理解 青年の心理学 ミネルバ書房
- 落合 良行 1994 青年心理研究における3方法:「観る」「確かめる」「伝える」青年心理学研究第6号
- 鏡 幹八郎 1995 アイデンティティの心理学 講談社
- 返田 健 1988 青年と生き甲斐 青年心理学ハンドブック 福村出版
- 渡辺 恒夫 1992 自我の発見とは何か 東邦大学紀要, 24
- 山中 恒 1975 ぼくがぼくであること 角川書店
- 注) 本論は、第38回日本教育心理学会シンポジウム「アイデンティティの本質を得る(宮下一博企画)」において話題提供を行った内容に加筆したものである。